

(15) 環境教育方法としての巨大地図遊びの有効性に関する考察

EFFECT OF LARGE-SCALE COMMUNITY MAP AT ENVIROMENTAL EDUCATION

小浜 明*・江成 敬次郎*・中山 正与*・斉藤 孝市*

Akira KOHAMA*, Keijiro ENARI*, Masatomo NAKAYAMA*, Koichi SAITO*

ABSTRACT; This paper is designed to present the validity of using Large Scale Community Map for Enviromental Education, analyzing local people's response at the map.

260 visitors of a school festival, held on Oct.19 and 20,1992, made 365 remarks (only simple labeling are excluded), and 65 of them (17.8%) are concerning enviroment.

Answers of questionnaire indicates that people pay more attention to global or national scale problems than those of their own communities, such as, problems of garbage. Concerning people's behavior related to enviromental matter, the result are interpreted that they often adopt the way that they think it is good for enviroment in their daily life, sometimes try to get information, but not ready to get involved in social movements.

The advantages of using Large Scale Map as a teaching material for enviromental education are listed below.

- (1) As the characteristics of a map itself, there are:
① points ② lines ③ surface ④ space
- (2) Making remarks arouse people's :
① attention to the community ② affection to the community
③ attention to the general enviromental problems
- (3) The situation provides :
① fun ② encouragement ③ communication

KEYWORDS; Teaching Material for Enviromental Education, Large-scale Community Map, Advantages

1. はじめに

環境問題への接近方法として、参加者の環境問題への認識の質を問わずに意識させられる方法がないものか。その方法は、楽しく気軽に参加でき、また開催しやすく、身近な環境から意識させる方法がよい。

このような方法の一つに「巨大地図」を使った方法があり、身近な環境である「まち」の環境に住民意識を接近させる試みとして、国内の先行例に中村¹⁾、八尾ら²⁾の研究がある。

前者は「住民参加のまちづくりはどうすればよいか」という視点から、住民がまちへの関心や愛着を持つためのきっかけ作りに、後者は環境学習の視点から、都市・生活型環境問題の解決には従来の自然型環境学習よりも「まち」型環境学習により生活者の意識の向上を図る導入に、「巨大地図」を用いている。

さて、中村は論文のまとめで、巨大地図が「多くの自治体や学校、地域団体などで主催可能なこと…(中略)…他の調査や学習機会への入り口としての役割を果たす」³⁾と述べ、巨大地図を使った追試と新たな応

* 東北工業大学 TOUHOKU INSTITUTE OF TECHNOLOGY, Sendai, Japan

用の可能性を示した。八尾らは、巨大地図を環境学習の機会の入り口として用い、その後のステップである「おもしろ探偵団（まち歩きイベント）」の資料づくりに地図上の書き込みを活用し、巨大地図の使用法を発展させた。

ところで、【表-1】は両者のイベントにおける巨大地図の特徴をまとめたものであるが、著者らが追試を行なった結果によると、環境教育イベントとして巨大地図を用いた場合の評価はまだ検討の余地があるように思えた。

2. 大学生を対象とした試

一般に学生の大学周辺地域に対する帰属意識は低く、地域環境に関する認識も低い。今日の学生に関する問題の一つとして、このような意識・認識の低さから派生するものも少なくない。例えば、深夜の騒音、迷惑駐車、ゴミの出し方、その他コミュニティ生活のルール違反などがあげられる。

また、このような学生によって引き起こされるさまざまな問題を危惧して、大学周辺の住民側も同地域に学生が増えることを歓迎していない。そして歓迎されないことは、大学やその付属施設が移転する際に特に顕著になることがある。大学や学生寮の移転計画がでると、学生の移動に伴うバイク・自動車事故の増加、騒音、迷惑駐車、ゴミの散乱などの生活環境の悪化を懸念して、移転先の地域で移転反対運動が起きることは決して希なことではないからである。

大学が環境教育を掲げ、環境に対する意識を高めようとするとき、まず自らの大学の学生の地域環境に対する認識を高める必要を強く感じる。そして、地域住民も集まる学園祭は、この目的を達するには格好の場の一つと考えられる。

3. 目的と方法

本報の目的は、環境教育の観点から、巨大地図の教具としての有効性を、イベントに参加した人の地図上の書き込みとアンケートから明らかにすることにある。イベントは1991年10月19、20日の大学祭の場を利用して行なわれた。

ゼンリンの住宅地図（1/1500）をつなぎ合わせ、約10m×7mの「ガリバーマップ」を作り、会場である教室に敷いた。中心には会場である本学が位置している。

入場者は入り口で「あそび方のコツ・パンフレット」とアンケート用紙を受け取り、靴を脱いで地図上にあがり、その上に散りばめられたペンを使って、自分の家、近所の公園、好きな場所、お店、何でも自由に書き込んだり、紙製の簡易ものさしを使って距離を測ったりする。また、人の書き込みを読んだり、それに書き付け足したりして遊ぶ。

なお本番にあたっては、話し合いを3回（①先行研究の検討、②アンケート・蒔きピラ・参加者及びスタッフの学生用パンフレット【表-2】の作成と予備実験の検討、③本番実施手順の打合せ）、主催者学生への説明会を1回、スタッフの学生とミニ・ガリバーマップを予備実験として1回実施した。

表-1 先行例にみられる巨大地図の特徴

中村	八尾
(1) イベントとしての楽しさ	(1) まちへの関心の高まり
(2) 多様で創性的な街の見方・街との関わり方	(2) 平面的認識とまち全体に関わる知識の習得
(3) 街の再認識	(3) 行動へのつながり
(4) 生まれるコミュニケーション	(4) コミュニケーションの発生
(5) 関係・参加の容易さ	
(6) 基礎（住んでいる周りに限定された中での）自身体験の広がり	※（ ）内は小紙が貼った部分
(7) 「書き込んだことが」具体的な事業や施策とは直接結びつかない	

表-2 あそび方のコツ・パンフレット（学生用）

「ガリバーマップ」のあそびかたの「コツ」（主催者用）

「ガリバーマップ」は、見学に来た人が地図上で遊んでくれないと、具体的に地図上に書いてくれないと、ただの自地図にすぎません。そこで見学に来てくれた人が書いてくれるように、積極的に話しかけを行なう必要があります。その「コツ」はつぎの三つです。

(1) 見学者が入ってきたら、まずあいさつをし、以下の物を手渡す。

- ① アンケート
- ② あそびかたの「コツ」パンフレット
- ③ アンケート記入用がールペン（細書き用）
- ④ 地図記入用のマジックペン（細書き用）

パンフレットを読み終わったのを確認して、地図に案内し、地図上に記入しはじめたら終わり。そうであれば以下に進む。

(2) 地図上に注意を向けさせながら、次のことを聞き出す。

- ① どこから来たか尋ねる（きいていない町名くらいで）。
- ② どこやって、どこを遊んで来たか尋ねる。
- ③ 学校や勤め先はどこか、そこには何で通っているか尋ねる。
- ④ 好きな場所はどこか、好きなお店はどこか尋ねる。
- ⑤ よく行く公園、好きな道、遊んでいる場所、嫌いな道がないか尋ねる。
- ⑥ 「地図上におもしろいメッセージがないか探してください」とメッセージに注意を向けさせます。
- ⑦ 「みんなに知ってほしいことやメッセージがあったら書いてください」と促す。

ここまでで、書いてくれなかったらあきらめてもいい。ただ、

(3) 見学者が質問してきたらわかる範囲で、できるだけ丁寧に応答する。初対面なので、自己紹介したり、できるだけ相手をリラックスさせることに心掛ける。

以上です。
どんな見学者にも、怒りのような表情を持って控えてください。
書いてくれる、くれないも、あなたの腕次第です。

4. 結果と考察

4. 1 参加者の属性

【表-3、4、5、6】はガリバーマップ開催日時と参加者の属性である。

両日とも天候に恵まれ、気温も比較的穏やかだったこともあって、入場者総数は2日間で260名にも達した。アンケート回収数は99件で、回収率は38.1%であった。

先行例では、中村のアンケート回収率が59.1%（8日間で425人中251件）、八尾らのそれが61.3%（4日間で155人中95件）と、両者とも約6割の回収率を示している。これらに比較すると本イベントでは、1日当たりの入場者数は多いものの、回収率は低い。

この入場者数の増加は、本イベントが学園祭の企画の一部として行なわれ、他の見物ついでに集まった多くの人を入場者としてすることができたことがあげられる。しかし一方で、ついで見物者の増加は参加者の目的意識の低下を招き、アンケート回収率に大きく影響を与えたと想像できる。

4. 2 環境に関する書き込み

(A) 書き込み数

書き込み総数は、家にただ〇を付けただけの単純なものを除き365件であった。入場者総数が260人なので、ひとり平均1.41件の情報を地図上に書き込んだことになる。

先行例で、八尾らは書き込み数を発表していないから比較できないが、中村はその数を740件（1.74件/人）と公表している。比較してみると、平均書き込み数にはそれほど差が生じていない。人間ひとりの書き込み量には限界があり、それほど数多くの書き込みができないということであろう。

(B) 環境に関する書き込み

さて、書き込み総数の中から環境に関する書き込みに絞って拾い出したのが、【表-7】の5項目である。ここでいう環境に関する書き込みとは、中村の『書き込み分類基準』で、

①現状の街の中の特定の要素を対象にするもの

《「A.批判・要望 B.魅力 C.意外・面白さ・驚き」》

②街の変化に関するもの

の2つの基準で書き込まれたものである。

その結果、店の紹介や単に知っている人の家、印だけ付けたものは除いて65件が認められた。全書き込みに占める環境情報率は17.8%（2割弱）となる。

中村は報告の性格上、環境情報率ということでは公表していないが、前述に基準で拾い挙げてみると、環境情報数は250件（33.8%・3割強）になった。

たった2例の検討ではあるが、巨大地図イベントの環境情報率は、対象が違っても2～3割程度と推察される。

4. 3 参加者の環境への関心度

表-3 開催の日時・場所・天気と気温

場所:	仙台市太白区八木山青野町19-1 東北工業大学1号館1階(112教室)
日時:	1991年10月19日(土) 13:00~16:00(1日目) 10月20日(日) 10:00~16:00(2日目)
天気:	曇 最高気温:19.2(△0.7) 最低気温:12.3(△2.8)
天気:	晴 最高気温:18.8(△0.5) 最低気温:10.9(△1.6)

表-4 入場者数・回収アンケート数と書き込み総数

1日目入場者数:	83名	アンケート回収数:	43票
2日目入場者数:	177名	アンケート回収数:	56票
入場者総数:	260名	アンケート回収数:	99票(男・45票) (回収率:38.1%)(女・54票)
地図上の書き込み総数:	365件	(用い家に印を付けたものは除き書き込みがあるものだけ)	

表-5 回収アンケートの年齢構成

12歳	3
14	1
16	4
17	4
18	14
19	1
20	17
21	12
22	6
23	5
24	1
29	1
40	1
53	1
無記入	7
計	99

表-6 居住地別人数

仙台市	太白区:38 青葉区:9 泉区:7 若林区:5 宮城野区:4 仙台市以外:19	82
その他無記入		13 4
計		99

表-7 環境に関する書き込み:65件

① 現状の街の中の特定の要素を対象にするもの (三角公園) いちようの木に囲まれて過ごす秋の夜は最高 城跡より仙台市街が見渡せる (戦後の開市の面影を残す仙台中央市場) 井戸あり (鶴ヶ岡公園) 夜の名所観望多し (伊達八幡神社) 隠れたデートスポット
② 批判・要望・不快: 14件 (予定だけで開通しない道路) 八木山への道 早く開通させて (石原森林公園) 地下鉄での森林が破壊されている MY APARTMENT 周囲がすくうさうさ!! (青葉通り) 排気ガスが多い! (青山一丁目の急坂道) この坂はたまらん せまい道
③ 変化・整備: 6件 (上手内1丁目付近) ダイキモンド山 今は団地 (仙台市立古城小学校) JRRグラウンドだった (四見グラウンド) つぶれてしまった 元「名画座」のキップ売り口がさびしい
④ 自然物・歴史物・イデヤ: 7件 a splendid ginkgo tree! (陸奥国分寺薬師堂を指して) どんと祭 (鹿嶋門天) 毎年7月下旬仙台フィルハーモニーの 星空コンサートが行なわれる (ちびっ子広場) しばり地蔵 仙台名木百選の太木 (林子平墓) 知ってるよ。海国民族で有名なもんね
⑤ その他: 12件 たぬきが出る。たぬき出現 こっこの方向に大観望が見える (金剛沢私有林) きょうりゅうやま (太白山) 自然観察の森ができたよ 最近殺人事件があった

参加者の環境への関心度をく（Ａ）環境意識とく（Ｂ）環境行動とに分けてアンケート調査を実施した。環境意識では、参加者の環境問題の興味・関心が、①地球・国家的問題、②身近な問題、③その中間のどこにあるかを見分ける目的でたずねた。

また環境行動では、生活の中での環境問題に対する参加者の取り組みを、①知的行動②日常的行動③積極的行動の３項目に分け、１よくする、２ときどきする、３しないの３つのカテゴリーで調べた。

（Ａ）環境意識

上位に地球的・国家的規模、下位に身近な問題が目立つ。そのような中で、「ゴミ問題」が３番目に着けているのが注目される。【表－８】

この意識はテレビ・雑誌などマスコミの影響を受けやすいと考えられる。なぜなら、地球環境が問題として取れ上げられはじめたきっかけのフロン・地球温暖化などの項目、またイベント実施当時、テレビ等で数多く報道されたゴミ問題に関する項目に参加者の意識が集中したと考えても不思議はない。

（Ｂ）環境行動

【表－９】から、このイベントの参加者集団の環境行動像が推察できる。「環境問題に関する本、雑誌、テレビなどに目を通す（知的行動）」では、「ときどき」に全体の６３．６％、「空カン、空ビン類はゴミとは別に出している（日常的行動）」では、「よく」に同じく７４．７％、「環境問題に関係する集会や行事に参加している（積極的行動）」では、「してない」に同じく８５．９％の回答が集中している。アンケートに答えた人の環境行動像をまとめると、「知的行動」が中位に、「日常的行動」が高位に、「積極的行動」が低位のレベルにあることが読み取れる。

なお、「知的行動」「日常的行動」「積極的行動」を有意差検定したところ、「知的行動」と「積極的行動」の間には何らかの関連があると考えてよい（危険率１％）という結果が出た。つまり、普段から環境問題に関する本や雑誌・テレビなどに目をよく通すということは、環境問題の集会や行事によく参加する割合を高めていると解釈してよい。しかし、その相関はそれほど強いとは言えない。

（クラメールの関連係数が０．３３。この係数は１に近いほど関連が強いことを示す）。

４．４ 環境教育イベントにおける巨大地図の教具としての有効性

環境教育イベントの視点からみた巨大地図の教具としての有効性は、アンケートから【表－１０】の３項目１０種類に特徴づけられた。

（Ａ）地図の要素

この要素は地図が本来的に持っている特徴でもある。それは(1)点的認識、(2)線の認識、(3)面的認識、(4)空間的認識の４種類である。なお先行例では、中村が特徴としてあげている「街の再認識」の一部分を、八尾らが特徴として指摘している「平面的認識とまち全体に関わる知識の習得」の中身を、分類・整理したことになる。

(1)点的認識とは、「仏舍利がどこか判った（１９歳・♀）」「友だちの家が判った（２１歳・♂、１８歳・♀、１６歳・♀）」など、単に『場所が判った』というもので、２３票寄せられた。

(2)線の認識とは、「家から小学校まで３００ｍ。約５分だが、直線でこれだけだと判った（１２歳・♀）」「大学までの道が判った（２０歳・♂）」など、『２点間の距離・道が判った』というもので、８票寄せられた。

(3)面的認識とは、「広さに驚いた（２３歳・♂）」「仙台も結構広いね（１９歳・♀）」など、『非

表－８ 最も早く解決してもらいたい
環境問題を３つ選択（環境意識） N=99

第1位	フロンガスによるオゾン層の破壊	41人 (41.4%)
2	二酸化炭素などによる地球温暖化	33 (33.3%)
3	ゴミ問題	31 (31.3%)
4	熱帯雨林の減少	25 (25.3%)
5	自動車などの排気ガス	20 (20.2%)
6	酸性雨	19 (19.2%)
7	飲み水の安全性	17 (17.2%)
7	産業廃棄物	17 (17.2%)
9	食品添加物	16 (16.2%)
9	川のにごりや汚れ	16 (16.2%)
11	原子力発電所	15 (15.2%)
11	農薬散布	15 (15.2%)
13	資源回収	11 (11.1%)
14	自動車・バイクなどの騒音	4 (4.0%)
15	その他	1 (1.0%)
	不明	16

表－９ 環境行動 N=99

知的行動	普段から環境問題に関する本や雑誌・テレビなどに目を通している。（無記入 1）	よく ときどき してない	11人 (11.1%) 63 (63.6%) 24 (24.3%)
日常的行動	空カン、空ビン類はゴミとは別に出している。	よく ときどき してない	74 (74.7%) 18 (18.1%) 7 (7.1%)
積極的行動	今日以外に、環境問題に関する集会や行事に参加している	よく ときどき してない	5 (5.0%) 9 (9.1%) 85 (85.9%)

日常的なスケールの体験』で、10票寄せられた。

(4)空間的認識とは、「地図上の方位と日常認識の差(23歳・♀)」「駅から見たそれぞれの方向と距離(18歳・♀)」など、普段はビル・山の陰になってよく判らなかつたが、こうして地図で見ると「なんだ、この方向にあったのか」という『意識の中で空間を構成しているもの』である。このような回答は4票寄せられた。

(B) 喚起の要素

「実行してみたい」「考えてみたい」という要素を呼び起こさせられた。それは(1)まちへの見方の喚起(2)まちへの愛着の喚起(3)一般的環境問題への関心の喚起の3種類に分類された。先行例では中村があげている「多様で個性的な街の見方・街との関わり方」、八尾らが指摘している「関心の高まり」や「行動へのつながり」の一部分と関連する。

(1)まちへの見方の喚起には「ゆっくり歩いてみないと気づかないことが多くある(20・♂)」「もっとまわりを見て歩こうと思う(20・♀)」「まだまだ仙台のことを知らないんだなあ(19歳・♀)」という『まちに対する新たな見かた・関係の持ち方』を生じさせた記述、6票認められた。

(2)まちへの愛着の喚起には、「緑が多くいい街です。みんなで守りましょう(23歳・♂)」「八木山はいいところです(19歳・♀)」などの『まちへのいとしさ』を呼び起こされたという3票がある。

(3)一般的環境問題への関心の喚起とは、「資源を大切にしたい(19歳・♂)」「ゴミを分けてだそう(24歳・♂)」などの『環境保全的行動を引き起こすきっかけ』として認められた12票である。

(C) 交流の要素

この要素が高ければイベントとして成功したと考えられる。それは(1)楽しさ(2)応援(3)コミュニケーションの3種類に分類できる。先行例では、中村の「イベントとしての楽しさ」「生まれるコミュニケーション」、八尾らの「コミュニケーションの発生」に該当する。

(1)楽しさとは、「It was nice to walk around Sendai in stockinged feet! (?歳・♂)」「おもしろい・楽しかった(14歳・♂、19歳♀、17歳・♀、22歳・♂)」などで、22票認められた。

(2)応援とは、「よく作ったね(19歳・♀)」「ごくろうさま(20歳・♀)」「来年も来ます(19歳・♀)」「(工業大学で)こんな勉強をしているなんて知らなかった(19歳・♀)」「東北工業大学をますます好きになります(19歳・♀)」で、18票認められた。

(3)コミュニケーションの形態は、①会場での『話しコミュニケーション』と②地図上での『文字によるコミュニケーション』と③アンケートでの『主催者に対する要望・呼び掛け』に3分類された。

①会場での『話しコミュニケーション』とは、アンケートに「学生が親切である。Aクラスです。社会に出て通用します(54歳・♂)」とあることから、参加者の一部では主催者側のアシスタントである学生とのコミュニケーションがうまくいっていたことがアンケートから読み取れた。この他にも、人と人との話しコミュニケーションは、イベント実施中に回していたビデオカメラに、数多く見受けられた。

なお、八尾らが分類している「家族のコミュニケーション」「異年齢層間の交流」も観察された。また、会場に一緒に来た「同伴者間の交流」が、かなりはつきり認められた。

表-10 アンケートにみるガリバーマップの特徴

地図の要素	点的認識	・私含何れがどこかだった ・友達の家がいつかあった ・知らないお店を発見できた	23票
	線的認識	・家から小学校まで300m。約5分だが、直線で ・校舎と校門の家のあいじょに遠い ・大学の道が判った	8票
	面的認識	・広さから聞いた ・仙台はゴチャゴチャしているね	10票
	空間的認識	・地図上の方位と日常認識の差 ・方向がわからなかった ・駅から見たそれぞれの方向及び距離	4票
喚起の要素	まちへの見方	・ゆっくり歩いてみないと気づかないことが多くあ ・自分のまわりを歩くと、知らないところがある ・なるべく早く仙台に帰りたい ・街を歩きたい ・友人を誘って、一緒に歩きたい ・友人を誘って、一緒に歩きたい ・友人を誘って、一緒に歩きたい	6票
	まちへの愛着	・緑が多くいい街です。みんなで守りましょう ・八木山はいいところです ・八木山はいいところです ・八木山はいいところです ・八木山はいいところです ・八木山はいいところです	3票
	一般的環境問題への関心	・ゴミを分けてだそう ・資源を大切にしたい ・環境を大切にしたい ・環境を大切にしたい ・環境を大切にしたい ・環境を大切にしたい	12票
交流の要素	たのしさ	・It was nice to walk around Sendai in stockinged feet! ・おもしろい・楽しかった ・おもしろい・楽しかった ・おもしろい・楽しかった ・おもしろい・楽しかった ・おもしろい・楽しかった	22票
	応援	・よく作ったね ・ごくろうさま ・来年も来ます ・(工業大学で)こんな勉強をしているなんて知らなかった ・東北工業大学をますます好きになります	18票
	コミュニケーション	・学生が親切である。Aクラスです。社会に出て ・通用します ・社会に出て通用します ・社会に出て通用します ・社会に出て通用します ・社会に出て通用します	23票

②地図上での『文字によるコミュニケーション』とは、八尾らが詳しく分類している。このイベントの地図上にも「発信型」「受信型」「同意・同感」「否定・言い返し」「付け足し」「感想・意見」「書き込みを読んだ後の行動」の書き込みが八尾らの指摘と同じように多数認められた。なお本論はアンケートを中心とした分析なので、詳しくは八尾らの分類を参照してほしい。

③アンケートでの『主催者に対する要望・呼び掛け』は、「デートスポットを教えてください」「家がのっていない」「もっと大きい巨大マップを作製してください」などで、23票確認された。

5. まとめ

最後に、巨大地図の環境教育教具としての有効性と若干の問題点を述べたい。

環境教育のひとつの手法として考えていった場合、中村が指摘したように「特別な能力をもたない人でも容易に開催でき」るが、書き込みから得られる環境情報は3割以下と予想され、環境教育の方法としては高いというほどではない（本報では2割弱）。

しかしアンケートから分析すると、まちに対しての(1)地図の要素{①点的認識②線的認識③面的認識④空間的認識}、参加者に対しての(2)喚起の要素{①まちへの見方②まちへの愛着③一般的環境問題への関心}、イベントを通じての(3)交流の要素{①たのしさ②応援③コミュニケーション}の3項目10種類が環境教育教具としての巨大地図イベントの特徴的要素として確認できた。このような要素は先行例からも見いだしう特徴でもある。

また、このイベントを通して、学生の地域環境に対する意識を向上させるという目的は、アンケートにみられたように、「まちへの見方」「まちへの愛着」「一般的環境問題への関心」を引き出すことで、地域に目を向けさせるという役割を少なからず果たした。さらに、地域住民と学生間における問題の溝を埋めるとまではいっていないが、少なくとも参加した何人かの地域住民と学生の間ではコミュニケーションは行なわれていたといつてよい。

6. おわりに

今回の巨大地図への参加者集団は、大学祭に併せて実施したため、ほとんどが10代後半から20代前半に集中している。しかし、このような集団においても、巨大地図を使った環境教育の試みは失敗ではなかったと考えられた。それは、環境教育の側面から巨大地図を扱った場合、【表-10】にあげた有効性が、先行例などと照らし併せても、必ずといっていいほど併せ持つ特徴として見いだされたからである。今後いろんな場所でも追実験が行なわれ、新たな特徴や知見が見いだされると同時に、巨大地図を使った試みが、環境教育のひとつの手法として確立されればと考える。

最後に、このイベントを実施するにあたり、研究室の4年生、1年生約30人がスタッフとして参加した。学生をイベントスタッフとして参加させることで、彼らの地域に対する意識・認識の向上も併せて目的とした。アンケートの結果などから、その成果を浮き彫りにするまでには至っていないが、事後の感想ではイベントの評価として概ね肯定的であった。今後、こうした側面の評価方法を工夫するとともに、この経験がこれからの生活に生かされることを期待したい。稿を終えるにあたり、この試みの成果は、これらスタッフの協力によるものであり、その労に謝意を表したい。

1) 中村昌広「まちづくりへの参加の新しい局面とその道具としてのガリバー地図」『第24回日本都市計画学会学術論文集』1989

2) 八尾哲史ほか「地図遊びとまち歩きを通したまち環境学習に関する研究」『環境システム研究』Vol. 19 1991、同「まちにおける環境学習の実践形態の考察」『環境教育』Vol. 1-2 1992

3) 前掲1) p. 516